

■菩提僊那(ボーディセーナ) インド生まれの渡来僧。行基に迎えられ、聖武天皇、良弁と共に東大寺の“四聖”になった。

ぼだいせんな

..... 704= 南インドで、支配階級バラモン姓の婆羅暹に生まれる。

..... 713= 9歳:

のちに靈山寺となる登美山は、敏達天皇の頃より小野家が領有し、小野妹子の子と伝わる右大臣富人が壬申の乱に関与して閉居、熊野本宮に参籠して薬師如来を感得、薬草湯屋を建てて諸人の病を治し、尊崇されて鼻高仙人と称されるようになっていた。

百万町歩計画 722=18歳:

この間、すでに高名になっていた鑑真は、戒師を求める聖武天皇の意図を反映してか、左大臣長屋王から、文字の書き込まれた袈裟を贈られ、その言葉に感銘している。

渤海交流始・ 728=24歳: この年、流星が宮中に落下、孝謙皇女がノイローゼになってしまったが、聖武天皇の夢枕に末尾に記した登美山の鼻高仙人が現れ、湯屋の薬師如来を祈念すれば治るとのお告げがあり、行基を代参させたところ、皇女の病が快癒したという。

..... 731=27歳:

青年期に、_仏教を志すようになり、かつて中国に入った学僧や、入印した玄奘らに倣って、砂漠や険しい山道を難儀しながら入唐、五台山に至ったのち、洛陽大福先寺で鑑真の講義を聴聞して開眼、修行を始める。この間、のちに、ともに来日する2つ年長の道せん(王偏に睿)は、洛陽大福先寺に住して定賓に戒律を、北宗系の禪で二祖とされる普寂に禪と華嚴教学を学んでいる。

風土記完了・ 733=29歳:

聖武天皇が、戒師の招請のために派遣した僧栄叡、普照らの乗る、第十次遣唐使船4船が蘇州に入唐、

..... 734=30歳:

聖武天皇が、登美山に大堂の建立するよう行基に勅命。使節員や学問僧理鏡の要請に応え、_その帰国にあ

真備玄昉帰国 735=31歳:

無事に帰国したが、乗船した副使中臣名代の船は途中で漂流(他の1船は、崑崙国に漂着、わずかに生き残

..... 736=32歳:

った者が帰国したのは4年後で、残る1船は消息不明になっている)、

ようやく*林邑僧仏哲、唐僧道せんとともに来日、大宰府から摂津に着いたところで、行基に迎えらる。両者の出会いは、行基を文殊の化身とみる信仰とともに、伝説化していく。また、登美山の地相が靈鷲山にそっくりということから、寺の名称を靈山寺とすることになったという。この時、波斯人の李密翳や、唐楽演奏家の皇甫東朝、後に音博士となる袁晋卿らも来日、仏哲も林邑楽を伝えることになる。日本人とは全く異なる風貌のインド人、ペルシャ人の来日は史上初めてであった。

藤原四卿没・ 737=33歳:

平城京に入り、勅によって、道せんとともに、当時最大規模であった大安寺に住し、厚く待遇される。以後、「華嚴経」の諷誦と密呪を中心に活動。この時点では、先に記されている道せんは、北宗禪を広めるため、大安寺に禪院を設置し、「梵網経疏」を撰している。

藤原広嗣の乱 740=36歳:

畠田永世法・ 742=38歳:

僧栄叡、普照らが、揚州大明寺の住職鑑真をようやく見出し、正式に来日を要請、以後、何度も試みては失敗という苦難はよく知られている。_正倉院に遺されている優婆塞貢進文の一つ、大安寺僧僊那が、出家者として推薦した平城右京の秦大蔵弥智は梵本陀羅尼であり、密呪は、弟子の日本僧への伝授されていく。

大仏造立の詔 743=42歳:

仏教による、世の中の平穏を願う聖武天皇が、盧舎那仏(東大寺大仏)の造立の詔を発する。

行基没..... 749=45歳:

行基が死去。

懐風藻..... 751=47歳:

_僧正に任じられる。道せんは律師になり

大仏開眼..... 752=48歳:

*東大寺盧舎那仏像の開眼会では、体調の優れない天皇に代わって開眼導師を務め、道せんは呪術師を担当した。開眼会に参加する大安寺僧のリストでもなお、道せんの方が前に記されているのは、出家してからの年数の多い順であったようだ。

..... 753=49歳:

鑑真の来日がようやく実現、

鑑真来日..... 754=50歳:

聖武天皇が、ようやく入京した鑑真を師として、光明皇太后、孝謙天皇とともに、大仏の前で、菩薩戒を受け、東大寺内に戒壇院をつくらせ、

聖武天皇没・ 756=52歳:

_死去してまもなく、

孝謙天皇讓位 758=54歳:

この間、道せんは、吉野の比蘇山寺に入り、修禪に精励し、山岳修験者にも影響を与えたという。

光明皇后死・ 760=56歳:

大安寺において西方を向いて合掌したまま、没した。大和国の登美山の右僕射(右大臣)の林に葬られた。

同年、道せんも没している。

10年後、弟子の修榮が「南天竺婆羅門僧正碑并序」を編んでいる。天台宗にも精通していた道せんの弟子行表は、最澄の師になり、最澄の「四種相承」(天台・密教・禪宗・大乘戒)の思想は、道せんが伝えた玉泉天台(荊州玉泉寺の天台)の影響とされる。靈山寺は、のち、空海が訪れて霊力を感じ、奥の院に大辯才天女尊を祀り、以後、法相宗と真言宗の2宗兼学の寺になる。鎌倉時代には北条氏の帰依厚く、非常に栄え、豊臣秀吉、徳川幕府にも受け継がれ、国家安泰、五穀豊穰、武運長久を祈願する御朱印寺になって行く。